サン・ホセ・デル・カボでの皆既日食観測状況

山下俊樹

1991．7．11．の世紀の大日食を私もメキシコで観測することになり、そのときの状況をここに報告させていただくことになりました。私個人の観測報告ではないけれど、成り行きの説明上から個人的なことも含まれることをあらかじめお断りしておきます。

今回の皆既日食はその継続時間において、その最も長いところの値は６分54秒にも達し、22世紀までこれに匹敵するものはないという大日食。もちろん長いことだけが大切なのではないけれど、ひきつける魅力の一要因ではあるでしょう。その最長がおきるメキシコ本土は７月からは雨期に入り、その雨量は日本の梅雨を上回る。その本土へのツアーのチャンスも一つ二つあったけれど、やはりその晴天確率からして、メキシコへ行かれた多くの方々と同様に、カリフォルニア半島を選んだ。そしてラパス行きを計画された方からのお誘いもいただいた。だがなにせ学期末、学校勤務の私にとっては欠勤日数を可能な限り短くする必要があった。そして見つけたのが、サン・ホセ・デル・カボへの３泊５日のツアーだった。このツアーには旅程日数や出発・帰国日の違いによりＡ・Ｂ・Ｃの３コースがあり、私が選んだのはその中の最短日程のＡコースである。すぐに申し込みをしたが、定員締切間際であり、同じ様に短い旅程を必要としている人達がみえることを感じた。行程の長短・日程の違いはあれ、コースによってホテルは違うが、日食前日にはどのコースもロスアンゼルスに宿泊。日食当日の未明、真夜中にホテルをたち、３便に分かれてチャーター機でサン・ホセ・デル・カボに向かった。観測当地は晴天と伝えられていたが、機内から見る空の様子は、必ずしも楽観出来るものではなかった。山脈をはさんでラパスの方面は快晴と見受けたが、われわれの観測地の方は一面に雲が広がって見えた。しかし到着した現地の天気は良かった。空港から数10分車で走って着いた観測地は、日食の為に休校にした小学校の構内を借り切ったものであった。私の属するＡコースは34名、それにＢ・Ｃコースとロスで集めた人達と、併せて約200名程が小学校構内に準備された３ヶ所の観測地に適宜に陣取った。３ヶ所とはいってもそれは構内で隣接していて、とりたてて分かれているというほどではない。そこは各コースについてみえるインストラクターの方達によって、前日までに南北線がひかれるなどの準備がされていた。タイムもマイクで流され、高度82度で食甚になるという炎天下ではあったが、学校構内故に時間の合間に休める木陰もあり、また昼食や飲料等も用意されてあり、またわれわれ観測者以外が立ち入らないようにも配慮され、観測環境は非常

に良かった。日食当日に観測地に向かうということから懸念していた準備時間も、割にゆとりがあった。こうしてむかえた世紀の日食であったが、皆既が近づくにつれ薄雲が太陽近くにあらわれ、観測者の人達をやきもきさせた。しかし雲の影響は、通常の観測にはほとんど支障がない程度であつた。私の撮影したフィルムにおいては、コロナやダイヤモンドリングなどの日食主体の望遠写真では雲はわからず、皆既中の星野を目的の広域の写真では薄雲が写っていた。居会わせた観測者の誰しもが、長くのびたコロナの流線・見事なダイヤモンドリング・大きなプロミネンス・少なくとも４個の惑星などを見たはずである。チェルスキーでの日食でも一緒だった大江・井上氏は白布とビデオによるシャドウバンドの観測をされ、（私自身は、赤道儀がやや不調でその調整に気をとられて気付かなかったが）皆既よりも相当前から確認されているようである。当地の皆既継続時間の予報値は６分25秒であり、主観の問題ではあるけれど、それはかつてサハら砂漠で出会った６分間のときよりもずいぶんと長く感じられた。

このツアーの行程では観測後すぐにロスに戻るため、帰路の第１便の人達は第４接触を待たずに飛行場に向かった。参加者名簿に類するものがなく、直接交流した方々しか同行者の詳細はわからないが、前述の大江和彦・井上聡氏の他に、Ａコースでの面倒を良く見ていただいたインストラクターの田中政明さん、そして清水天文同好会の山田昇御夫妻、またＡコースではないが愛知県の尾崎公一氏等が参加して見えた。